

備忘録～理事長の独り言⑤～

鳴海 明敏

「カウンセリング」という言葉で言い表される人との関りは、カール・ロジャーズの「Counseling and Psychotherapy」（1942年）から始まった。この書物を通じてロジャーズと出会い、この「カウンセリング」を日本中に広めたのは友田不二男であった。

敗戦後の日本の大学で知能検査や教育相談の開発・普及の仕事に従事しているうちに、その欺瞞性に気づき絶望していた友田は、茨城キリスト教短期大学学長のローガン・フォックスから紹介されたロジャーズの上記の書物に一筋の光を感じて、その書物に書かれていることを頼りに、クライアントとの面接を繰り返し逐語記録を起し、独自に研鑽を深めた。数年後、この友田がローガンの誘いに応じて、10泊11日の「カウンセリング研究討論会」を茨城キリスト教短大を会場に開催したのは1955年昭和30年であった。このカウンセリング・ワークショップは、日本初のカウンセリング・ワークショップであった。

このワークショップに、当時青森県中央児童相談所の小川恵子児童福祉司が、嘱託医田村幸雄（精神科）の勧めで参加したのが、青森県における「カウンセリング」についての歩みの第一歩だった。その後、小川は同僚の鈴木治子等とともに、同僚や関係機関の人に呼び掛けて、学習会を始めたのが、青森カウンセリング研究会の始まりである。青森カウンセリング研究会は1958年昭和33年、中央児相の小川、鈴木、家庭裁判所の秋元調査官が連名で趣意書を配布し、県立青森高等看護学院において田村幸雄医師が、「カウンセリングについて」というタイトルで講演を行い発足した。発足当時の会員数は33名で、司法グループ、福祉グループ、教育グループ、看護グループにそれぞれ連絡者を置いて、毎月研究会を開催し、会報も発行していた。

ここで、少し当時の青森県の状況について見てみよう。鈴木は、青森カウンセリング研究会30周年記念誌「道をもとめて」に次のように記している。

「空襲で青森市が廃墟となって20日もたたぬうちに戦争は終わった。戦後の混乱がまだおさまらぬ1948年昭和23年から、青森県は給費生を募集し、3回にわたり日本社会事業専門学校（今の日本社会事業大学）に30数名を派遣し、新しい社会福祉を学ばせた。私の入学した研究科同期には小川恵子さんがいた。1950年昭和25年県に採用された私は、県庁で生活保護を担当し、小川さんは児童相談所で、浮浪児狩りなどの言葉に代表される当時の要保護児童の処遇にあたることになった。」

その後、鈴木は児童相談所に異動となり、「古ぼけた木造の開拓会館だった狭い建物の、玩具の遊び場もない児童相談所で、相談指導を担当する僅か 5 人の職員のうちの一人となり、“人間がキライ”という私と、“人間を愛したい”という小川さんとが机をならべて、担当ケースについて毎日語り合い、たしかめあうことになったのである。」と記している。

青森カウンセリング研究会についても、同じ「道をもとめて」の中で鈴木は、「会の名称は、青森カウンセリング研究会と称することにした。このとき、あえて青森県という文字を使わなかったことも、会長を設けなかったことも、規約を作らなかったことも、権威や拘束を排し、組織の形にとらわれない、自由で平等な弾力性のある学習の場とすることを考えてのことであつたし、このことは田村先生の考えでもあつたし、みんなの考えでもあつた。田村先生の人徳を慕ってまとまっている人達には、権威によって組織を固める必要などなかったということもできる。こうして青森カウンセリング研究会は発足をみた。」と記している。

研究会は、毎年中央から講師を招いて講演会を開催したが、昭和 33 年はローガン・ファックス、昭和 34 年は国立精神衛生研究所佐治守夫、昭和 35 年と昭和 36 年は友田不二男であった。その後、研究会のメンバーの転勤を契機に、弘前市でも研究会が発足している。

1971 年昭和 46 年に青森県で最初に開催されたカウンセリング・ワークショップとそれに私が参加した経緯については、前回書いた通りである。青森カウンセリング研究会は、このワークショップを第一回として、2020 年令和 2 年コロナのために中断するまで毎年 3 泊 4 日のワークショップを第 48 回まで開催している。その後、2023 年令和 5 年第 49 回からは 2 泊 3 日の日程で世話人なしで再開し、今年度は第 52 回を 6 月 26 日から開催する予定になっている。

(了)